



発生した。メジロも例外ではなく、この山行期間中ずっと悩まされた。防虫剤をもたなかったメンバーは、40~50箇所は刺されたろう。

次の4 mの滝は、左岸を直登する。遡行を開始して1時間ほどで上部の二俣まで来た。水量は3:1で左沢の方が多いが、立安沢への下降を考えて、右に入る。じきに水は濁れ、尾根に向かって一気に高度を上げる。ヤブはそう濃くないので、沢筋から離れてブッシュをつかんで登る。風はまったくなく、異常に気温が高い。体がだるく、熱射病にかかったようである。目の前の尾根に出るまで、1時間も費やしてしまった。

(記・

[タイム] 滝の沢出合(8:30)→右俣出合(8:35)→左俣出合(8:45)→沢終了(9:35)→尾根(10:50)

### 蒲生川支流滑沢右俣 1994年7月31日

林道の橋から沢に入る。滑沢の名の通り、ナメが続く。2 mの小滝を過ぎ左より支沢が入ると、すぐ二俣。右俣に入る。高さ3 m、長さ8 mのナメ滝を越えると、その先しばらくナメ床となった沢を歩く。アブの大群に悩まされながらの遡行である。虫避けスプレーもすぐに効かなくなる。左より8 mの滝となって支沢が入る所にある10 mの滝を越えると、単調な沢歩きとなる。V字峡のような部分を2カ所過ぎると、沢はまた広がった。最後は地図を確認して、下降を予定している宿場下沢(仮称)との境の尾根に出るべく左の支沢に入り、すぐの分岐を

右に入って小滝2つを越える。このあとすぐ水がなくなり、尾根に上がった。

(記

[タイム] 滑沢出合(8:40)→二俣(8:45)→沢終了(10:50)→尾根(11:00)

### 真奈川支流宿場下沢(仮称) 1994年7月31日

LJ

滑沢右俣の遡行を終え、尾根上で小休止してから下降に移る。すぐに水流が出てきて、小滝。その後左から沢が入り12mの滝となる。左岸を懸垂で降る。続く5mと4mの滝は、難なく降りられる。その先でこの沢の本流に出た。

本流はV字峡のようになっているが、沢そのものは単調である。右岸から2本の支沢を合わせると4mの滝。沢は深くえぐれていて、廊下のようなものである。左右両岸とも10mほどの高さはあろうか。この滝を降るとまもなく真奈川本流に出た。アブの攻撃を避けながら、左岸の登山道に上がる。

(記・

[タイム] 尾根(10:20)→源頭(11:30)→真奈川本流(12:40)

